

崑山集の基礎的研究

荻野, 秀峰

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

38

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1965-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019135>

崑山集の基礎的研究

荻野秀峰

- 一 はじめに
- 二 崑山集の刊年について
- 三 構成及び編集方法
- 四 類題目の拡充
- 五 作者の分布とその拡大
- 六 崑山集の序
- 七 結び

(一) はじめに

『崑山集』は、『鷹筑波』『玉海集』とともに貞門の三大撰集とよばれ、その中でも発句集としては唯一のものでありながら、現在まで未翻刻であり、その完本も極めて少ない稀覯本である。同書についての論考も^{註①}少なく、殆んど管見に入らない。もっとも貞門俳諧の研究も遅れており、貞門俳書の書誌的整理すら本格的にはなされていないのが現状なのである。そうした現状にかんがみ、私は法政大学大学院日本文学科所蔵の『崑山集』の翻刻を意図し、その殆んどの準備を終えている。その作業を通して得た研究ノートを整理したの

が以下の報告であり、私の『崑山集』研究の第一歩としての基礎的調査のまとめである。まず、『崑山集』の刊行年代の考証より論をすすめてゆき、作品解題を兼ねながら本書の有する諸問題を明らかにしたい。

(二) 『崑山集』の刊年について

私が調査した限りでは、現存の『崑山集』はすべて明暦二年七月刊行の秋田屋平左衛門板であって、その刊記には別に重板の但書は存しない。従って、現存本刊記からは、『崑山集』の初板が明暦二年刊のようにも見えるのであるが、『崑山集非言』と副題した『馬鹿集』が明暦二年正月に同じ秋田屋平左衛門より出版されており、『崑山集』の訂正板ともいうべき『崑山土塵集』も明暦二年二月に出版されている。更に『崑山集』の後集とされる『玉海集』も明暦二年八月の刊行であるから、明暦の秋田屋本以前に、『崑山集』の初板が刊行されていたのではないかとの疑問が当然生じよう。第一にその点から検討してみたい。

まず、明暦本の刊記は次の如くである。

明曆二年丙夷則吉祥日
 寺町通円福寺前町
 秋田屋平左衛門板

この刊記は卷第十三、大尾に存し、法大蔵本、早稲田大学図書館蔵本、天理大学図書館わたりや文庫蔵本ともに同じである。前述したように「重板」の但書はないが、この刊記は、印刻よりみて明らかに入木補正したものと認められ、従前の刊記を削って改めたか、以前の板木になかった刊記を新たに加えたかの、どちらからしい。

一方、『崑山集』には、(1)昌易の序、(2)良徳自跋、(3)「附録」廻文の部の識語と、三種の年時識語があり、それぞれ左の如くである。

- (1) 慶安第四稔仲秋下浣講習堂主人昌易謹敘
- (2) 時これ慶安辛卯初冬野夫良徳しるし侍る
- (3) 慶安二曆仲秋吉辰日 崑山館道可処士註②鑿板

以上三つの識語ともに年時は慶安四年であり、明曆二年との間には五年という年月の差がある。この差は、同時代の貞門俳書の序・跋の年時と刊年との差に比較しても異常であり、明曆本以前に『崑山集』が出版されている疑いは、いよいよ濃いようである。

ここで注目したいのが、『崑山集』の批判書である『馬鹿集』(近世文芸資料と考証 榎坂弘尚氏翻刻)である。『馬鹿集』の出版は明曆二年正月であるが、同書の中には、刊行の三年前にあたる「承応二年弥生上浣日」の識語があり、出版こそ三年後であったが、承応二年には既に同書が成立していたことが知られる。従って、『崑山集』は、どんなに遅くとも、批判書『馬鹿集』の成立した承応二年三月よりは以前に刊行されていたと考えるべきであろう。

また延宝四年(明曆二年より二十年後)刊の『俳諧渡奉公』と、

元祿五年刊の阿誰軒の『俳諧書籍目録』を調べてみると、『崑山集』の刊年や出版書肆は不明だったらしく、次の形で掲出されている。

崑山集 十三冊 貞徳撰 昌易序 令徳開板
 (俳諧渡奉公)

崑山集十三冊 令徳撰 昌易序 令徳板
 (阿誰軒「俳諧書籍目録」)

右のように、出版書肆の名はなく、令徳の「開板」「板」となっている。また両書ともに、『崑山集』の記載位置の周囲には刊年不記の本が集められており、『崑山集』が刊年不明の本として扱われていることが知られる。念のため、両書の『馬鹿集』についての記事をみると、

馬鹿集 六冊秋田屋平左衛門板下
 明曆二年正月
 (俳諧渡奉公)

馬鹿集 六冊 作者不明 秋田屋平左衛門 開板
 明曆二年正月
 (阿誰軒「俳諧書籍目録」)

とあって、批判書の『馬鹿集』については正確な記載をしており、『崑山土塵集』の場合も同様である。従って、両書が『崑山集』を刊年不記で掲載していることは、当時『崑山集』に刊年不記の本が存在したことを反映したものと見てよいかと思われる。また、両書は『崑山集』を「令徳開板」または「令徳板」としているが、これは出版書肆名のない本に基づいていたため、跋文を書いた良徳(令徳)を開板者と認定したものかと思われる。

以上のことから、延宝四年の『俳諧渡奉公』の頃には、年記も刊

者名もない『崑山集』が流布していたことが確実であると思われるが、そのことと、前述した如く明暦本の刊記が入木補刻と認められることを合せ考えると、刊年・刊者不記の『崑山集』こそが承応二年以前に刊行された初板本であり、明暦の秋田屋本は後印本であると思われるであろう。『俳諧渡奉公』が明暦本に言及していないことからは、秋田屋本の実際の刊行が延宝以後であることすら考えられるのではなからうか。

次に、『崑山集』が慶安四年末には既に出版されていたことを証する資料として『尾陽発句帳』をとりあげたい。『尾陽発句帳』^{註③}の編者は尾張の清水不存、刊行は慶安五年三月、野田弥兵衛開板である。不存の跋に『崑山集』との関係が示されており、翻刻の機会にめぐまれそうにないので、全文を翻刻しておく。

今仁は秋津洲のほかまでなかれゆく水のみなもときよき歌の道は筑波山のかげよりもしけくおはします道にや 天かしたおたやかに民のかまともにはきはふ折から九重の都人は大和歌にかゝりて春の花秋の月にこゝろをなくさめける片つ田舎の野』亭にも卯の花のさかりには郭公をまちて俳諧の句をつらねぬることとはつゝきもこはくしきかみこくわんの躰にて雪の夜をあかし侍れとも身をたのしむは此道の徳ならずや 抑崑山集にいらむことをのそみて予か愚なる句ともを長頭翁のもとにつかはしけるに』なか点あまたなきにしもあらずよろこほひて良徳かりのほせ侍るに撰集はや首尾してむなしくかへりぬとやせましかくやおもふところにある人来りていはく幸我聞およひたる両点の句ともおほし覚へぬるあらましかたり侍らんあつめて発句帳にせよと是非としるられ書たて』尾陽発句帳と名付ぬ 猶

巻頭第二第三の句ともは題号にそむきたるににたれともいさゝかこゝろへ侍りてすへをくものならし

慶安辛卯十二月 土日 □養寺

慶安五年三月 良辰

野田弥兵衛開板

この跋文によつて、『崑山集』が慶安四年に撰集され、成立したことは明らかである。しかも、不存の跋の年時識語は慶安四年十二月であるが、「撰集はや首尾してむなしくかへりぬ」の時期、及び『崑山集』開板の時期を限定し得る記事が、『尾陽発句帳』の内部に見られるのである。同書、冬部、霰の類題の中の次の詞書のある句がそれである。

崑山集の開板出来侍りて 三条本屋にすり置しをみて当座板にしてもするや崑山玉霰 不存

この不存の句によつて、『崑山集』が慶安四年の玉霰の降る頃（十月乃至は十一月）には既に「開板」されていたことが確実である。詞書にいう「三条本屋」が明暦本の刊者の秋田屋平左衛門であるかどうかは、にわかには断定し得ないが、秋田屋の住所「寺町通円福寺前町」は、元禄期の京都絵図によつても三条と四条の中間にあつて三条とも四条とも言い得るから、その可能性もなきにしもあらずであろう。それはともあれ、以上の考察によつて、『崑山集』は慶安四年十月頃には出版されていたと言つてよいものと信ずる。良徳の跋文の年時たる「慶安辛卯（四年）初冬」が、ほぼ刊年にあたるわけである。

(三) 構成及び編集方法

『崑山集』は四季類別の部立に従つた発句集である。総句数七九七

九句、作者数九七六人、中本(縦十九・五センチ横十四センチ)、十三巻・十五冊^{註④}。そのうち一冊は「附録」廻文の部として廻文の句だけを一卷にまとめてある。第一巻の序には、貞徳の孫である昌易の漢文の序があり、貞徳の序、及び良徳の自跋も収められている。所収総句数のうち、「あまねく人のしれる句」(良徳跋)として「作者名をけずった句」が二四一三句、貞徳名の句が九三一^{註⑤}句収められている(A表)

15冊	(15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)															
	附録廻文部	四季	冬部	秋部	夏部	春部	第一巻	部立	作者名のけ	作者名の	貞徳名の句	所収句数				
二四一三	四二	一八四	一三五	一二四	一九一	一〇七	八九	一一一	一二六	二〇八	一八五	二二七	二七五	五二七	一〇五	九〇七
四六三五	二二六	三三二	二二九	二二〇	三二七	二二八	二六二	一九四	二二九	四二二	三六二	二七八	三三七	二七八	八八	六八六
九三一	ナシ	一〇一	七三	五五	八九	七一	三八	三三	五九	七七	一一〇	四四	八九	四四	四四	四八七
七九七九	二七八	六三七	四三七	三九九	六〇七	四〇六	三八九	三三八	四二四	五八四	七四七	四八七	六五三	四八七	六八六	七四七

る。上掲A表には、部立、作者名のけずられた句、作者名のある一般入撰の句、及び貞徳名の句を、各巻ごとに類別して掲出した。この表に明らかかなように、春部三巻四冊、夏部二巻三冊、秋部五巻五冊、冬部二巻二冊、「附録」廻文部一巻一冊となっている。「作者名のけずられた句」(甲)、「作者名のある句」(乙)、及び「貞徳名の句」(丙)は、各々その収録の順序があり、冒頭に甲を置き、ついで乙、末に丙を置くのが、各巻題ごとの定形である。次に巻一の春部の「元日付立春」の類題の中より適宜に一部を抄出して、句の排列を示すとともに、「作者名のない句」の場合にはその出典を明らかにしたい。出典は句の頭に作者名とともに記した。

崑山集 巻第一 春部

元日付立春

鷹山 鳥丸 垂相

「今朝むかふ東鑑のもちる哉

右はからす丸垂相の遊されしと也

犬 宗恕 〆年人もそたつ初はむつき哉

犬 重頼 〇ものんまうとれから来るそけふの春^{註⑦}

犬山 〆四方に春たちはたかれる日あし哉

犬 正友 〆年明て開かぬ梅やふる暦

犬 興之 〆あら玉の年のかしらや鳥かふと

鷹山 日能 〆春たつといふはかりにやかさり縄

鷹 日如 〆身も沙門御座連毘沙門今日の春

鷹 日如 〆ころもけさ春きて布施や数珠繫

鷹山 宗朋 〆立かへる年はとへほにはる日哉

寛永十八年元日に

鷹 全翁 112 寛永や十八公の門の春
 毛 一正 113 ぶりぶりの玉の緒ゆるくことし哉
 毛 丹羽衆 114 祝へけふ山もかすみの引渡し
 鷹 西武 115 門松のふた木やみその橋かかり
 作者 不知 116 九重のかすみや九献けふの春
 毛 正章 117 年徳の御やしるならぬ宿もなし
 毛 追 正良 118 来る春の引付ならし朝霞
 毛 追 令巾 119 うたひ初やけふ歳徳のかみかかり
 毛 追 未得 120 年徳を祈る願書は試筆哉
 毛 追 未得 121 年と月とひとふたみつの始哉
 毛 追 繁正 122 としとくの御闌や一二三ヶ日
 山 季吟 123 書初や万歳の点をうち祝
 山 " 124 山里やいつも正月門の春
 山 " 125 太へいやあけて天下の春霞
 山 " 126 こう経てそかめのかすみをくまんさい
 127 年号をからけてや又老の春
 右は阿野垂相の遊されしと也
 128 四方拝や東南聖王の御代の春
 129 幾ひさけ屠蘇酒くまん代々の春
 130 葉子は千代をへんしやく年始哉
 131 年の数やくまんとそひやく三千度
 132 葉子の母はすなはちふくる哉
 133 祝へ今朝あら玉の緒のくすり酒
 139 わか多ひするや平の京の町
 140 一女三なんねんたてと若多ひす

藤谷貞利
 住田吉左衛門政信
 高瀬多衛門元晴
 八木藤左衛門吉治
 中嶋内蔵貞宜
 末吉道節
 奥西市左衛門友三

141 顔も鯛もつり髭なれや若多ひす
 194 難波人するはみつ物連歌かな
 195 台にけさかさる鏡やもち道具
 202 柴に又餅花さくや二度の春
 208 祝ふ腹や心肝腎のさうに餅
 234 万代の富貴もしきのはしめ哉
 240 富にあかぬ正月蓋の長者哉
 248 くるや早き足利のまた太郎月
 255 年の緒は三味線か一二三ヶ日
 260 けふ出る日や三かいのくら開
 270 つてん天下めて太鼓や松拍子
 274 正月をかさねのとしの御慶哉
 293 とりの年は一つかひかや春の春
 304 去年をけさもつてたゝする霞哉
 319 祝へ千代の春のひおほち鶴の孫
 320 朝清め邦幾千里そ民の春
 321 めくりあふ輪王の御代の春日哉
 322 おまはりにくきやうや并ふ四方拝
 323 今朝ほしに匂ふは四方はい花哉
 327 ありたつた独たつたることし哉
 328 万物の出る春日や如意宝珠
 332 佐保姫も子をうみ山のむつき哉
 336 せはく共御宿申さんけさの春
 344 異国みなしよくせん春の日本哉
 345 正月はもりていは腕かんの餅
 橋本甚三良重宗
 梶山保友
 末吉道節
 鶏冠井良徳
 江戸如淵
 山本西武
 中川重徳
 富永次右衛門燕石子
 池田ノ身
 了安寺夕翁
 大津勘兵衛如貞
 作失念
 江戸林鹿
 渋谷安明
 藤谷貞好
 鶏冠井良徳
 長頭丸
 同

354 貧報も輪宝となれ御代の春

361 節分にいらぬやけふの開大豆

飢饉しける年

363 よねのねもたつやす国の今年哉

372 数の果報つく羽子板のえ方哉

此春よりむすこの百敷ちかき所へ

うつりてすむを祝ひて

377 家の風貴せんねんの始哉

378 眠月てふ最初いつれのおほん時

379 海老のそふや伊勢の御か花の鏡餅

以上、『崑山集』の編集方法の例証として、春部「元日付立春」に

収録された三七九句より抄出した。この類題の「作者名のけざられた句」は一二句であるが、その殆んどの出典はつきとめ得た。句の頭に記したように、『犬子集』（『誹諧発句帳』とも重出する句がその大部分であるはず）『鷹筑波』『毛吹草、同追加』『山の井』等であるが、その他『崑山集』全体では、『犬筑波集』の発句の約半数以上を収めており、『空磔』からもとっている。例証とした「元日付立春」の中の「作者名のけざられた句」の出典でいえば、『鷹筑波』八〇句、『犬子集』三五句、『毛吹草・同追加』九句、『山の井』九句の順であるが、『崑山集』全体では、『鷹筑波』『犬子集』『毛吹草・同追加』『犬筑波』『山の井』『空磔』の順位である。『鷹筑波』からとった句数が圧倒的に多く、約六割を占めている。

一つ注目すべきは、北村季吟の句の扱いである。季吟の句は『崑山集』には四五句収録されており、そのすべては『山の井』の「年中日々の発句」よりとられているが、季吟の句は名前をけざって

ない。そして「作者名のない句」の次（乃至は作者名のある句の最初）におかれており、季吟の句だけは貞徳についての特別扱いをうけている形である。季吟の貞門における位置、あるいは特に良徳と親しい間柄であったことによるのであろうか。季吟が別格であることは、西武の句が「作者名のある句」として五句とられているにすぎぬことをみても明らかであろう。

次に「作者名のある句」の中の著名な貞門俳人をあげると、石田未得、高島玄札、富永燕石、清水不存、一原友我、橋本每延、荻野安静、片桐良保、高瀬梅盛、了安寺夕翁、末吉道節、井口如貞、渋谷安明、住田政信、馬淵完畔、梶山保友、藤谷貞利、奥西友三等である。良徳系とされる俳人もさすがに多いが、芳賀一品の名は見えない。『崑山土塵集』にも彼の句は見えない。一品は寛永二十年生れであるから、未だ俳壇に登場しない時期であると考えられる。

「作者名のけざられた句」の作者についてみると、本勝寺日能、重頼、親重、望一、慶友、宗朋、定時、信安、一葉子、静寿、重供等であり、宗畔、道節、西武、梅盛、未得及び良徳等も多い。『鷹筑波』『犬子集』『毛吹草・同追加』の主要な作者ということになるが、出典からして、当然のことといえよう。

以上、「作者名のない句」の出典や、その作者について一応概観してみた。『鷹筑波』以下の書を『崑山集』編集の直接のテキストとしたことは、句の順位に殆んどちがいのないことで明らかである。ところで、『毛吹草・同追加』の使用は、いささか問題がある。『犬子集』『鷹筑波』とちがって、『毛吹草・同追加』は重頼が貞徳門を離脱してから編んだ俳諧の作法書であり、歳時記である。同書に対しては正式の『郡山』、貞室の『氷室守』が非難書として出

されており、重頼は貞徳門流の異端者であったのである。貞徳自身も『崑山集』の序で、暗に『毛吹草・同追加』を非難している。その非難している書を利用して、いささか不審なのである。しかし『毛吹草』は、序によると「発句付句は、犬子集の以後人の語きかせる爰かしこの句」を集めて収めた書であるから、良徳の言う「あまねく人のしれる句」を収録するという『崑山集』編集の方針上、便宜的に利用したと言うべきかもしれない。

ここで良徳の跋のうちの編纂の仕方について述べている文を引用しておきたい。

抑^{註⑧}のする所の犬築波 竹馬狂吟集其外古き句の作者あまねく人のしれる事なればしるさす 今あつむる所の巻頭作者の次第天みつ御神の御闈にまかせ奉り或は時節の前後によりて定めおはりぬ 作者の名字かきかふる事呂後の名をいみて雉を野鶏といふの謂ならし 且又人々の粉骨の言葉等を同科ありとて除かんもほるなく筆をくはふるもありのそくもありのみのねたし心はなしの花めつらしき句からいつれを前後とやせん ひとへに日月の遠近を論せしに似たり今きく所を初音とし程とききするをいとおしむ事山く富士の雪の時しらぬかことし

ここで良徳は、「犬築波竹馬狂吟集其外古き句の作者あまねく人のしれることなればしるさす」として、古句は作者を記さずと明記している。前代の『犬築波』『竹馬狂吟集』の句には問題はないが『犬子集』『鷹筑波』の句は、存命の作者がかなりいるのであるから、いささか問題のある編集方針と言えよう。「古き句の作者」として、親重、重頼、西武、日能、日如、徳元、道節、重供、未得、玄札、安静、良保等が、当代の人でありながら名を示されていない

わけで、『犬子集』『鷹筑波』以下の句が、『犬築波』『竹馬狂吟集』^{註⑨}の如き、いわば俳諧の古典ともいべき書の句と、同列に扱われているのである。このことは、後に引く『崑山集』序に見られる貞徳の態度とも関係しよう。

貞徳は、当代に編纂された歌書すなわち俳書を非難しながらも、「その内の宜しき句」を選んで収録したと『崑山集』の序で言っている。これは良徳の「人々の粉骨の言葉等を同科ありとて除かんもほるなく筆をくはふるもありのそくもあり……」という態度と共通しており、ともに『崑山集』を俳諧の集大成としようとしている態度が示されていると言えよう。それだからこそ、異端者である重頼の『毛吹草』にまで範囲を広げ、既刊俳書中の名句を、模範とすべき句として、新撰句と区別するために作者名をけずって、各類題目の前半に収録したのであろう。こうした観点から、『崑山集』のはじめに『犬築波』以降の古句・模範句を置き、ついで一般入選の句を入れ、最後に貞徳の句を多く入れてしめくくった形の編集方法を、古今の俳諧発句の集大成を意図した、貞徳の俳諧に対する積極的姿勢のあらわれであると言ってもよいのではなからうか。貞徳がかつての俳諧に対する消極的な態度、すなわち、俳諧を和歌連歌よりも低次の文芸としてみていた態度をぬけだして、『御傘』の序にみられるような俳諧の文芸性を認める態度に転じたことと対応しているのが、右に述べたような『崑山集』の編集態度であるとも言える。

(四) 類題目の拡充

貞門における代表的撰集としての『崑山集』は、その類題目の拡

充にもその特色を見せている。類題の拡充は季題及び季語の拡充と
 みることができよう。季題・季語の基礎が貞門において殆んど定着
 したことは諸家の説を待たずまでもなく明らかである。類題句集とし
 ての初発は『犬子集』であるが、以後『毛吹草』『山の井』におい
 て拡充され、類題句集『崑山集』において定着したのである。『毛
 吹草』の春部に収められた四五の類題がすべて『崑山集』に収めら
 れている事実からだけでも、『崑山集』の類題の拡充を知ることが
 できよう。更に『毛吹草』に収められた「連歌四季の詞」「俳諧四
 季の詞」などの「詞」については、「連歌四季の詞」「俳諧四季の詞」
 が『崑山集』にとられ、「俳諧四季の詞」はその全部が含まれてい
 ると言い得る。『犬子集』にあつては未だに、それだけの類題及び
 「詞」は収録・定着していない。一例として、『犬子集』『崑山集』
 の春部の類題を列挙して比較してみよう。

元日	若菜	子日	梅
鶯	霞	残雪	春氷
春雨	木目	柳	松若緑
春草	土筆	若和布	春月
春鷹	帰雁	雉子	蝶
椿	桃花	杏子	花
桜	桜鯛	梨花	辛夷
海棠	小米花	茶花	躑躅
葦	蕨	藤	歎冬
永日	蛙	喚子鳥	春郭公
暮春	雑春		

『崑山集』春部 類題目

元日 <small>付立春</small>	毬打	羽子板	子日
若菜 <small>付糝</small>	白馬節会	懸想文	千寿万歳
初寅	綱引	踏歌節会	左義長
賭弓	具足餅	霞	鶯
梅	春永 <small>付春</small>	春雪	春霜
薪能			
初午	仏別	柳	松若緑 <small>付松花</small>
木目	椿	畑打	角組芦
若和布	土筆	蕨	朧月
花			
返田	苗代	春鳥	雲雀
春鷹	雉子	焼野	沈丁花
小米花	木瓜花	茶摘	蛙
若鮎	葦	胡蝶	紫苑
已日 <small>秋</small>	桃	三月三日	曲水
永日	躑躅	藤	春祭
三ヶ所念仏	御身拭	雑春	春郭公
暮春			
桜	桜鯛 <small>付貝・付ノリ・桜貝・海草</small>		
白鳥花	梨花	海棠	辛夷
春草	山吹	帰雁	燕

『犬子集』春部には四二の類題目があり、『崑山集』には七三の類
 題目がある。『毛吹草』の発句部には四五の類題目、『玉海集』には
 五五の類題目が収録されている。このように『犬子集』の類題を圧倒

しているだけでなく、歳時記である『毛吹草』をも凌駕し、『玉海集』の類題目以上の拡がりをも『崑山集』はもっているのである。このことは、単に老大な句集という量の問題ではなく、貞門俳諧の集大成を意図した編纂態度にかかわる現象の一つと見なすべきであろう。更に貞門俳諧における大きな傾向であった発句註⑩の独立化、俳句化、という流れの集約としても理解されなければならない。

『崑山集』を、単に老大な句数のみを誇る杜撰な句集であるとする評価もあるが、それは変更されねばなるまい。確かに巻目の不統一やいくらかの作者の句の誤認はあるけれども、類題集・発句集としての『崑山集』には、集大成という、それなりの価値を認めて然るべきであると思う。

(五) 作者の分布とその拡大

次に、『崑山集』に収められた発句の作者の分布について考察してみたい。『犬子集』以後の貞門俳諧の集大成書である『崑山集』は、当代の俳諧の流行ぶり、全国的な拡がり註11を示す資料としても貴重であり、同書の発句作者の地域的分布を考察することによって、貞門俳諧の伸長ぶりを把握することが可能であろう。

『崑山集』には、作者名のある一般入撰句が四六三五句あり、その作者数は九七六人、その居住国数は三十一ヶ国以上となる。次に掲げたB表は、貞門時代の主要な俳書の五書『犬子集』『鷹筑波』『毛吹草』『崑山集』『玉海集』をとりあげて、比較表示したものである。この表によって『崑山集』が他の貞門諸俳書と比較して特に規模が大きいことが知られよう。B表の『崑山集』の分には「作者名のない句」二四一三句の作者約三〇〇人余が除かれているので

あって、このスケールは梅盛の『鸚鵡集』に匹敵している。

B表 註12

	作者数	句数	居住国数
犬子集	一七八	一五二八	六
鷹筑波	三三二	四〇四〇	
毛吹草	二六〇	二〇〇〇	一八
崑山集	九七六	四六三五	三一 (以上)
玉海集	六五八	三二〇〇	三五

B表によれば、作者数六五八人句数三二〇〇人の『玉海集』の作者の分布が三五ヶ国で、『崑山集』の三十一以上より多い。これは『玉海集』が明暦二年板行の、『崑山集』以後の大撰集であり、俳諧の流行の度合が当時は慶安四年より強かったことを示唆するが、『崑山集』の撰集によって貞門俳諧の勢力が伸張したことを示すとも言えよう。しかし『崑山集』には「名寄」「句引」がないため、私の居住国の調査はまだ不完全であり、調査が完了すれば『玉海集』とはほぼ同程度になるかも知れない。

B表に示されたように、『犬子集』以後『崑山集』に至る二十年間の作者・句数・地域の拡がりからみて、俳諧の流行・普及はまことに急速であったと言える。当代にあつては貞門俳諧の制覇がそのまま俳諧の普及であった。談林俳諧は大阪・京・江戸の都市にその勢力を集中して地方には殆んど浸透しなかつたし、また蕉風時代を過ぎ、江戸末期に至るまでも、俳書刊行の歴史からみて、貞門・古風の俳諧がその主流を占めていたといえるが、そうした貞門俳諧

の基盤は、慶安四年の『崑山集』撰集の時、すでに確立していたと言えよう。このことは、類題目・季題・季語の殆んどが『崑山集』に定着し、作者は京・大阪・江戸の都市だけでなく、九州・四国・山陽・山陰の地方にまで及んでいたことをもって知ることができ。別掲C表(49頁)は、『犬子集』『毛吹草』『崑山集』『玉海集』の四書から地域別の作者数を表示して、『犬子集』以後の俳諧作者の拡大と分布を示したものである。C表には四十ヶ国があるが、『崑山集』『玉海集』にその分布の地域はつくされている。更に新興都市大阪の俳諧享受層の拡大と、伊勢・和泉(堺)の凋落が象徴的である。また『犬子集』『毛吹草』には見えなかった尾張の作者群が、『崑山集』で一挙に五十二人も出現していることが注目される。飛躍したい方ではあるが、『冬の日』成立の俳諧的基盤は、慶安四年の時代に形成されていたとも言えよう。『尾陽発句帳』の不存の跋にみられる真摯な作者層が相当に存在したという前提がなければ、あの突然変異のような『冬の日』は生まれなかったにちがいないのである。C表によれば美濃の俳諧の基盤がこの頃に確立されたことも明らかである。

このように、作者の分布から考察しても『崑山集』が貞門俳諧の集約としての意義をもつことが知られるのである。

(六) 崑山集の序

慶安四年七月刊行の式目作法書『御傘』の序で、貞徳は俳諧に対してはじめて積極的姿勢を示した。「はじめは俳諧と連歌のわいだめなし」として、『鷹筑波』の跋や『新增犬筑波集』に見られる消極的態度を脱した。すなわち『淀川』では「犬とは犬桜犬蓼と言が

ごとし」と俳諧を卑下していた貞徳の俳諧観が、『御傘』では序に示された積極的姿勢に変わったのである。この俳諧観の変化は、当代の俳諧享受層の急速な拡大成長がその条件であった。『はなひ草』『毛吹草』そして『山の井』等の、式目作法書・歳時記と言い得る実作に必要な俳書の続刊からも推測され、『氷室守』『郡山』更に『歩荒神』などの論難書の出現からも知られる門流勢力の拡大、つまりは貞門俳壇の形成という状況の下に、歌学者・連歌師の自負を傷つけることなく、俳諧に積極的態度を示し得たのである。

『御傘』という老大な式目作法書をもって俳壇の権威として自から登場した貞徳は、ついで類題発句集『崑山集』を撰したのである。貞徳は眼病のために自から句集を編むことがならず、編者に鶏冠井良徳(令徳)を命じた。すでに述べたように、『崑山集』の編纂は俳諧の集大成を意図したものである。これは式目作法書『御傘』と対応する形のものである。すなわち慶安四年七月刊行の『御傘』と、同年十月刊行の『崑山集』とは、いわば貞徳の理論と実践のモデルであり、『玉海集』では付句を加えて更に貞徳の「点」を示している。『玉海集』の正式の序に、「爰かしこより雌黄のくちもらひたる発句の秀逸を、えらびあつめて長く世につたへんとす。名づけて崑山集・玉海集といふ」とあるのは正しいのである。貞徳の俳諧に対する態度、その積極的姿勢をみるために『崑山集』の序を全文翻刻して紹介しておきたい。

昔は連談共に発句をする時ならてはせさせす 既に亡父か師
宗養在世の間は都にて紹巴もせられす また聚楽の関白殿玄旨
法印にはね字の発句御所望有しに 仕りやうは相伝いたし置な
から昔の上手ともさへ手を付さりし事』を我等こときの者の

貴命なりとて仕事は思ひもよらすと固辞し給ひ侍る。今の若輩にかゝる貴人の仰あらはうけ悦びていたすへきかと思はる。いかにとなれば近年 指合のくうやうたにしらぬ者とも歌書を作り世上にひろむ 其書集』たる発句ともをみれば或は談言なく或は雑のものに季を持せ正躰なきことおほかり 今度その内の宜しき句を随分ゑり出して此帳に入侍る 猶見落したる句も有へけれど残たる諸のゑりくすは 丸か流をくまん人は等類にも』くり給ふへからす 但もろこしに身のくさき者有て隣里にきらはれしかと海浜に其くさきを好者ありしといへは猶可随所好者か 発句には連誼ともにならひあり 師伝なきものゝあつめたる発句などは何の用にもたつへからす 此』集を五六年以前に思ひ立て侍れともたれにかたらふへきやうもなきに鶏冠井の良徳 数寄人にて撰者の望有しかはあつらへ侍し 一二万句もよせたく思はれけれども此集のおそく首尾する事を世上にまぢかぬる人多しと』きゝて俄に首尾せらる あまり句数すくなきとて丸か昔年稽古に仕置たる発句ともを書加らる 此瓦礫を入なから崑山集とは名つけかたけれと崑山にも玉石ともにあるなればあらため侍らす 丸眼病ゆへわらはへに点せさ』するによりかくへき句にはかけすかくましき句に長点をかけたる事もや侍らんと心元なく侍れと 今一篇聞かんと思へは聞ぬさきより情つかれ侍るゆへほひなくこそ侍れ 又此集に似たる作の発句あるへきを撰者のあやまり』とはなすへからす 万葉を初め代々の集に同じ歌の作者のかわれるも多し 所と人とへち／＼なればぬすみよみたるにあらざるにより主をかたつけんいはれなし されとも此集にさやうにゆるさは作をぬすみ我ももとせし

句にて侍る』なんと偽り多かるへければさきへ書付たるを誠に後のをは入れず此集かく全部して世にひろまりて後この内の作に似たる句をつくられんは誠の盗人たるへし 此次に申度 事浜のまさこなれともあまりつるのあしなればかつ』／＼するし置侍る 長頭丸

この序は貞徳の俳壇における權威の確立を示し、俳諧を和歌・連歌とひとしなみにする伝授意識の強調が目立つ。「発句には連誼ともにならひあり 師伝なきものゝあつめたる発句などは何の用にもたつへからす」というのは、自己の正統性の主張であり、『御傘』により式目を制定した權威者の自負である。『鷹筑波』『新增犬筑波集』にはまったくみられなかつた積極的姿勢である。

なお、「指合のくうやうたにしらぬ者とも歌書を作り世上にひろむ」という場合の「歌書」とは俳書のことであるが、それまでに出版されていた俳書は、句集を除けば、『はなひ草』『俳諧初学抄』『毛吹草・同追加』『山の井』『久流留』等である。貞徳の非難の対象は、主として親重の『はなひ草』と、重頼の『毛吹草・同追加』であろう。また、『犬子集』『俳諧発句帳』『空つふて』等が「師伝なきものゝ集めた」集に含まれているらしいことが、『崑山集』所収句の出典調査の結果から推測される。

右に考察した如く、序にみられる貞徳の俳諧に対する積極的姿勢からも、『崑山集』が、貞門俳諧の集大成の意味で編集され出版された撰集であることが知られよう。『犬筑波集』以来の先行句をひろく収め、全国的に拡大した作者の多数の句を拡充した類題のもとに収め、更に指導者たる貞徳の句を九三一句も収録している『崑山集』の内容そのものからも、同じことが言い得るのである。

(七) 結 び

以上、『崑山集』の基礎的問題について、作品の解題をも含めて論及してみた。紙幅の関係で、貞徳の俳諧に対する態度の変遷（それは貞門の俳諧史上にはたした役割を考察するために重要な視点であると考え）についての論を割愛したので、『崑山集』の貞門俳諧に占める位置についても、十分には論及し得なかった。別の機会に再論を期したい。

近世初期に貞徳を柱として形成された貞門俳諧は、それまで連歌の余興として「よみ捨て」にされていた「俳諧の連歌」を、近世庶民の文学として確立する歴史的役割をになっていった。室町時代以後戦国期を通して、中世的貴族性への反逆として、卑俗的・破壊的な

滑稽化の傾向を強めていた俳諧の流れを、妥協的世界へ引き込んでいった面もあるが、俳諧を「文学」として定着させた貞門の歴史的役割は高く評価しなければなるまい。その貞門俳諧の中心であった貞徳の俳諧に対する態度の変遷を検討し、それとからみあわせつつ『犬子集』以後の貞門俳諧における撰集・刊行の事情を説明することが、目下の私の関心事である。従来、ともすれば、俳壇史・論戦史として貞門俳諧史を把握する傾向が強かったが、それだけでは不十分であろう。

最後に、本稿では扱い得なかったが、『馬鹿集』の『崑山集』に対する批判は、具体的に検証すると意外に杜撰であり、説得力を欠く批判が多いことだけを附言しておきたい。

作者数 C 表

	犬子集	毛吹草	崑山集	玉海集
山城	51	76	112	150
和泉	19	45	37	113
摂津	15	13	129	8
河内			1	
大和		2	8	25
伊勢	100	83	65	18
伊賀			1	18
武蔵	5	11	40	15
相模			1	
尾張			52	6
駿河			2	8
三河			11	
遠江				10
近江		5	9	8
出羽				5
加賀		2		9
美濃		2	35	19
越前		24	17	16
越中				21
越後			12	30
丹波		1	5	12
丹後		5		11
播磨		8		3
但馬			3	
因幡	2	1	3	15
伯耆			1	5
備前			17	17
備中			1	1
備後			2	
紀伊		10	36	13
安芸		1	1	
周防				8
淡路			1	
九州			11	31
四国			9	6

註① 崑山集の本格的論考は管見に入らない。「俳諧大辞典」(明治書院)の小高敏郎氏の解説、「俳諧人名辞典」の高木蒼梧氏の解説が一応まとまったものである。他に小高氏「松永貞徳の研究」正・続における言及と、榎坂弘尚氏「明暦二年の俳壇について」(国語・国文^{27巻}9号)の中での刊年について論考等がある。

註② 「誹家大系図」に「崑山館トアルハ(良徳の)別号ニテ道可トアルハ法名歟尚考ベシ」とある。

註③ 尾陽発句帳、零本一卷横本(秋、冬部下巻。編者不存の跋あり。日比谷図書館加賀文庫蔵)

註④ 冊数については「俳諧渡奉公」阿誰軒の「俳諧書籍目録」ともに十三冊とある。慶安本が全十三冊だったのであろうか。或は附録廻文部を除いた巻数であろうか。笹野堅氏「斎藤徳元集」にも十三冊とある。小高氏の解説には十四冊とあり、天理大学・早稲田大学所蔵の諸本が十四冊である。しかし法大本は巻一・巻五を欠いて十三冊であり、十五冊なければ完本とはならない。A表のように六巻が上・下二冊に分割されているのは、法大本だけのようである。

註⑤ 小高氏「俳諧大辞典」の解説には貞徳の句数を「百一句」としている。何かの誤解に基づくらしい。法大本によれば巻十三の冬部には貞徳名の句一〇一句が収録されている。それを貞徳の全句数としてしまったのかも知れない。

註⑥ (鷹)『鷹筑波集』(山)『山の井』(犬)『犬子集』(毛)『毛吹草』(毛追)『毛吹草追加』

註⑦ 横本「犬子集」(国会図書館蔵)、及び俳諧文庫本には「物まうは」とある。

註⑧ 句読点をいれるべき箇所は、一字余白をとって読み易くした。

片仮名は平仮名に、漢字の異体字は現行体に改めたものもある。

註⑨ 竹馬狂吟集は現在伝存を知られていない。立圃の絵俳書源氏鬢鏡(万治三年刊)の名寄に「宗鑑法師・山崎人也以誹諧得其名所編有竹馬狂吟集・犬筑波行于世」とあり、当代にあつては宗鑑の編者と考えられていた。良徳の跋によれば『崑山集』にもいくらかの句が収録されているであろう。

註⑩ 「発句の独立化」は言い過ぎかもしれないが、適当な言葉を思いつかなかつた。付句を前提としない、近代俳句の形式に似た、発句の単読という貞門の主要な傾向を説明した言葉と受けとっていただきたい。要するに長句の独立化、発句化である。

註⑪ すでに藤井博士・小高敏郎氏により犬子集・毛吹草・続連珠玉海集等の名寄による分析がある。

註⑫ 鷹筑波集の作者の居住国を調査する余裕がなかったので、同欄は空白のままにしておいた。しかし同書の作者の名をみると、殆んど京・大阪・堺・伊勢に集中しているようである。

補註 「作者名をけずった句」について

「犬筑波竹馬狂吟集其外古き句の作者」の中に、『犬子集』『鷹筑波』等の、当時の作者が含まれてよいものかどうかの問題がある。とくに『鷹筑波』は当代貞門作者の句がその殆んどをしめており、それを「犬筑波竹馬狂吟集」と一括するのは不自然のようである。そこで『犬子集』『鷹筑波』『毛吹草・同追加』等の現存作者の句は、後に(明暦本の際に)作者名をけずっている可能性が考えられる。現在慶安四年板が発見されていないために実証は困難であるが、次に述べる事実は、「犬筑波竹馬狂吟集」以外の、『犬子集』以後の貞門俳書より収録した句の作者名が、慶安四年板では削除されていなかった。

た可能性を考えさせる。すなわち、『崑山集』巻第二「柳」の項には、「作者名のない句」が六一句収録されているが、そのうち二句に、馬淵宗畔・江州粟津住政成の名があり、次の形である。

(毛)忠也 65 つつみをはみよ上さしの糸柳

(毛)吉林 66 さか髪と見ゆるはかせの柳哉

(毛)追未得 67 風ならて誰かあくへき柳髪

68 葛城やとのうはそくか姥柳 馬淵宗畔

69 姥柳枝をや杖につくも髪 江州粟津住政成

(犬)徳元 70 もへ出てけふるやふすへかは柳

(鷹)玄康 71 夜も明てみよ浦島か箱柳

(鷹)末重 72 枝に残る雪やおしろいの箱柳

(鷹)伊伯 85 川音にめは覚ぬかやふし柳

この例のように、同じ類題目の中の「作者名のない句」の途中に作者名のある句が存するのは、この「柳」の二句だけである。しかし、この二句の出典が不明であるので、全く別の俳書から採録したため特に作者名を注したとも考えられるから、前述の「可能性」はあくまでも「可能性」にすぎないことを認めざるを得ない。『馬鹿集』の批判を詳細に検討しても「可能性」を「断定」とはし得ないので、「作者名のない句」の削除については、疑問を提出するにとどめておく。

(三三年三月卒・法政大学第二高校講師)

斎藤徳元研究第一集

『戦国武将斎藤斎宮攷』

—俳人徳元の前半生—

安藤 武彦 著

私家版(タイプ印刷)
五〇頁

右の書籍を入手ご希望の方は

岐阜県多治見市陶元町一一二

安藤 武彦氏

あてお申し込み下さい。

頒価 百円 (送料共)